

英國における大学史研究

——アバディーン大学五〇〇年史研究叢書を中心に——

加藤詔士

- 一 大学史研究の新傾向
- 二 スコットランドにおける大学史研究
- 三 アバディーン大学五〇〇年史研究叢書
 - (一) 創立五〇〇年史記念事業
 - (二) 五〇〇年史研究叢書の刊行
 - (三) 個別テーマについての研究書
- 四 まとめ

一 大学史研究の新傾向

『オックスフォード教育学評論』は、一九九七年六月号を「大学史を執筆する」という特集号にあてている⁽¹⁾。編者の中・ハウアス (Janet Howarth) がいには、「大学史の執筆は一六世紀にはじまる好古趣味の伝統に端を発しているが、ほかの歴史の執筆と同じく、そうした伝統からの解放が急にはじまつた。それは一つには一九世紀の学問の専門化の結果としてであり、また一つには歴史家たちが現代関心事の伝達手段としてそれを用いるいろいろな方法を見いだしたことからである」⁽²⁾。

この特集号の一編に、「大学史研究…スコットランドから生まれた最近の労作」と題する論文が含まれており、冒頭で、最近の研究傾向が下記のようにまとめられている。

「ここの三〇年間ほど、大学史は今まさに始まろうとしている新しい研究テーマであるといわれてきている。大学の歴史研究——オックスフォード大学の八巻からなる大作が顕著な例であるが、ほかにも出版された本もあれば目下印刷中の本も多数ある——は、祝賀的なものから分析的な方向へ進んできている。二カ国以上にわたるテーマ研究、たとえばヨーロッパ諸大学総長・学長・副学長常置委員会 (CRE) が推進している研究は、社会学上の非常に重要な諸問題を解明している。そのなかには、適確な題名のついたローレンス・ストウン著『社会のなかの大学』(一九七五年)で紹介された問題もあれば、CRE所属の学者たちが著した個々の出版物のなかで取りあげられた問題もある。学術誌『大学史』ならびに同誌と共に二年毎に開かれる学会は、一九八一年以来、この大学史の研究テーマの推進計画をたて、今日まで続けてきている。スコットランドでは、過去一〇年にわかつ

てにわかに出された出版物は、この学問方面を描いて有益であり、今までの発展の姿を十分に表している。そしてまた、その出版物には、歴史を記念の印として扱う方法と歴史を批判していく方法との間にある根強い緊張関係が見えるとともに、大学史研究の将来性が高まっており、その方向がいくつかあらわれてきているのである。⁽³⁾

最近の大学史研究の代表例というなら、バーミンガム大学の「ホリステイック（全体的）な歴史」叙述にむけて現在進行中の研究計画もあげるべきであろう。これは、来る二〇〇〇年に、一八八〇年から一九八〇年までの百年史を刊行することを目指した計画である。そのさい、単なる一地方の個別大学史の執筆を旨ではなくて、本学を国内的・国際的な状況のなかに位置づけ、「カリキュラムの発展、学生の募集と卒業後の経験、社会的出自、ライフスタイル、大学教師の経歴類型と価値体系、法人団体としての大学、大学と地元、さらにはもつと広い背景との関連、とりわけ近代大学の基本原理と目的についての論議」などといった諸事項の分析が予定されている。しかも、「大学の革新と社会的意義をめぐる幅広い論議になにがしか寄与すること」を意図しているというのだから、注目される。⁽⁴⁾ このようなアプローチは上記の学術誌『大学史 (History of Universities)』にもみられる。一九八一年に創刊された大学史研究の専門誌である。

大学史研究が盛行にむかい、分析的になってきたというあたらしい動向が認められるのだが、それとともに、大学の歴史が執筆され刊行される体制の点においても、あたらしい動きがみられることが注目される。「大学史は、個々の機関の来歴を記録し著名な先祖たちをたたえるというかつて支配的であった伝統に従わなくなり、それに代わって、できうるかぎり広い背景、すなわち社会的・政治的・経済的・知的・文化的な背景のなかで解釈しようとしている。この仕事は共同作業となることが多く、また頻繁にコンピューターを利用していている。」⁽⁵⁾ という傾向である。このようなあたらしい位置づけと研究体制は、アバディーン大学史研究においてとくに顕著にみられる。のちに詳

述したいと思う。

二 スコットランドにおける大学史研究

(一)

スコットランドでは、先の引用文で指摘されているように、近年、大学史の研究が進展し数おおくの著作があらわれている。そのさい、創立記念祭が一大刺激剤となつてることが特徴である。

まず、アバディーン大学は、一九八五年に、一〇年後の一九九五年に創立五〇〇周年を迎えるにのぞみ記念事業を計画し、その一環として五〇〇年史研究叢書を刊行する事業を始めている。あたらしい執筆ならびに刊行の体制でもつてすすめられ、これまでに一〇冊が刊行されている。

ストラスクライド大学でも、創立記念祭が重要な促進剤となつた。同校は一九六四年にテクニカル・カレッジから大学へ移行したのだが、もとをただせばJ・アンダソン(John Anderson)の遺策にもとづいて一七九六年に設立されたアンダソン・インスティチューションに起源をもち、それから一〇〇年目にあたる一九九六年に、J・バット(John Butt)による单著『ジョン・アンダソンの遺産、ストラスクライド大学とその先行者たち一七九六—一九九六⁽⁶⁾』が刊行された。この「バットの同大学発展史は、慎重に選んだ資料にもとづいているのであるが、比較的広範な歴史上の諸問題はほとんど取り扱っていない。しかしながら、同書は、これまで学者の大きな関心を占めていた中世の大学と『赤レンガ(redbrick)』大学を越えて、英國大学史研究の視野を広げるのに有益である。」と評されている。

グラスゴウ大学では、目下、創立五五〇周年記念祝典にむけた準備が進行中である。ここでは、小さな連続セミナーがすでに始められているし、創立五五〇周年にあたる二〇〇一年の六月二一日から二四日まで、国際会議を開催する企画もすすめられている。⁽⁸⁾ 祝賀記念誌としての性格の強い『グラスゴウ大学、一四五一一九九六』と題する本も、すでに一九九六年に刊行されている。⁽⁹⁾ 同書は、図絵や写真をふんだんに盛りこみながら、大学の長い沿革を約一二〇ページで通覧している。ちなみに、同書の裏表紙にある紹介文には、次のような一節がみられる。

「本書は、一七世紀の激動の時代にグラスゴウ・カレッジがどのように発展したか、また同大学がいかにして注目すべき学問の中心地となり、一八〇〇年までにオックスフォードやケンブリッジとほぼ同数の学生を引きつけるようになったのかを描いている。一八七〇年に市街の中心地にあつた旧学舎を出て、西のはずれにある広大なゴチック様式の学舎へ移転した。それ以後の大学の歴史は、テーマ別に、学舎、学生生活、教育、研究、大学管理の五つの章立てで記述してある。本書は、当大学の歴史を垣間見させてくれる魅力的な話がいっぱい詰まつており、印象的な学舎の建つメインキャンパスを訪れる人にはよい案内書になっている。本書の最後に、学長グレーム・デイビィ卿が大学の未来像を披瀝している。」

祝賀記念誌としての性格の強い大学史だけでなく、もつと大冊の学術書を刊行する計画も進行していることはいうまでもない。創立五五〇周年にあたる二〇〇一年に出版されるときには、現在地への移転（一八七〇年）をめぐつて論争がおこつて以降の時期が詳細に分析されることになつている。⁽¹⁰⁾

（二）

スコットランド大学史研究の進展は、大学の創立記念祭が一大刺激になつたのは確かであるが、かならずしもそれだけに起因していたわけではない。R・アンダソン著『ヴィクトリア朝スコットランドにおける教育と学習機会』⁽¹¹⁾

(一九八三年) のばあいは、上記の三大学の歴史研究が刊行される以前の労作であり、特定の大学の創立記念祭が刺激材になつたわけではなかつた。

「同書は、スコットランドの研究の中核となる社会経済史家の小集団を強く励ますことになつたが、その人たちは、一九八〇年代当初、政治・宗教の観点から来歴を語るという限界から脱しようと、遅ればせながら努力をしているところであつた。これと時を同じくして、この著書が、ヨーロッパとアメリカの双方で教育史家と教育社会学者のあいだで非常に重要な役割になつてきていたいくつかのテーマを、ツイード河の北側に導入することになつた。この『ヴィクトリア朝スコットランドにおける教育と学習機会』が、アバディーン大学、ストラスクライド大学、グラスゴウ大学が歴史を記念の印としてとらえる努力をする以前に現れたがゆえに、アンダソンはスコットランドの視点からたいへん効果的に検討した、以下の多くの重要な問題にこれらの大学が関心を集中するのに役立つたのである。すなわち、市民と大学側の関係が大学によぼす影響、大学教師の専門職化、地元の専門家や子弟がいつかは就職するよう期待する中産階級の父兄から大学に寄せられる諸要求、大学の学生募集に対する地元の就職市場の影響、全国的な高等教育制度の策定（英國では一九二〇年以後）⁽¹²⁾、などである。」

三 アバディーン大学五〇〇年史研究叢書

(一) 創立五〇〇年史記念事業

アバディーン大学の創立は一四九五年である。この年の二月一〇日に、キングズ・カレッジが創設されたことに始まる。その後、一五九三年に第二のカレッジであるマーシャル・カレッジが創設された。両者は一八六〇年に合

併して、現在のアバディーン大学を形成することになる。

一四九五年を創立年とすると、一九九五年は五〇〇周年となるのにちなみ、それより一〇年前の一九八五年から、同大学は五〇〇年史記念事業 (Quincentennial History Project) を開始することになった。

この五〇〇年史記念事業が展開される時期といえば、折しも大学史への関心の高まりがみられたころであつた。それは『大学史』という専門誌が一九八一年に創刊されたことによくあらわれている。また、現在進行中のオック・スフォード大学史の執筆・刊行計画も同様である。一九八六年には、ロンドン大学歴史学研究所がこの年度の英米歴史家会議を「社会のなかの大学 (The University in Society)」というテーマで開催したが、この催しはロンドン大学創立一五〇周年を記念するものであつた。⁽¹³⁾ このような「大学史に専門的な関心がむけられる傾向、それに促されて優れた出版物が多数ある」ということが、アバディーン大学事業に大きな刺激になつた⁽¹³⁾ことは十分考えられる。

アバディーン大学五〇〇年史事業は、主に四つの事業から成っている。第一は、大学史をめぐる小さな連続セミナーの開催である。たとえば、一九八五年九月四日・五日には「変化するカリキュラム」というテーマで、一七世紀以来のカリキュラムの諸相、および大学と海外との関連をめぐる集会が開かれた。⁽¹⁴⁾ 一九八七年一〇月二九日・三〇日には、「本学の学舎」というテーマで一八六〇年以前の大学の建物をめぐる集会が開かれている。⁽¹⁴⁾ これらのセミナーにおける論議のなかで明かになつた大学史上の主要事項、ならびにそこで提示された史料は、後述の研究叢書のなかで詳しく考察されたり活用されたりすることが展望されていた。

第二に、アバディーン大学生の社会的出自および就職先に関する大規模な調査がおこなわれた。この調査結果をもとに学生のデータベースを編集することは、五〇〇年史記念事業の最優先事項のひとつとされた。

本学は、印刷刊行された卒業生名簿ないし入学登録簿や、手書きの受講者一覧（クラスリスト）その他の原史料を大量に有している。おおくは学生の社会的出自、出身校、親の職業についての記録を含んでいるのだが、「これらの資料がデータベースに集められたら、カリキュラムの組織化だけでなく、学生集団の構成と就職の形態に関する、数おおくの貴重な情報が引きだされうるであろうことは明らかである」。大学の社会史研究という興味ある研究を進展させる格好の素材となりそうであるが、検討すべき事項が多くて、専任の研究補助者なしでは進行することがむつかしいことから、相応の予算措置が求められることになったのだ⁽¹⁵⁾。

第三は、国際会議の開催である。国際的な会議となれば、アバディーン大学の歴史を、英國のなかだけでなく他の国々との関係のなかに位置づけて理解することが促進されるし、国際的な支援を促すことにもつながるであろうという点で、大きな意味をもつ。

たとえば、一九八六年の「アバディーンと啓蒙運動」会議、一九九三年の「都市のなかの大学」会議が注目され、その成果は会議の名称と同じ題名の書物として、それぞれ公刊されている⁽¹⁶⁾。前者は英國一八世紀研究学会（British Society for Eighteenth-Century Studies）と共同で、後者は雑誌『大学史』と共に、それ開催された。第一書はスコットランド啓蒙運動に対するアバディーンの貢献をめぐって考察し、同大学出身者はアメリカその他の植民地に出むき、スコットランド教育制度やアバディーン固有の文化や規範を伝えたことが解明されている。第二書は、タウンとガウンの種々の関係を記述する一方、アバディーン大学はかつてはまったく異質な二つの大学であったものが、一八六〇年の議会法でもつて合併して現在のアバディーン大学を形成したことを強調している⁽¹⁷⁾。

第四の事業は、研究叢書の刊行である。それも、大学の歴史を通史という形で執筆し刊行するというのではなく、大学史上の個々のテーマをそれぞれ何人かの執筆者に委託し、問題史的に考察する。その成果は大冊ではなく何冊

かの短編（各冊五〇、〇〇〇語以下、あるいは一二〇から一五〇頁ほど）として刊行するという計画である。各テーマはこれまで取りあつかわれることのなかつたテーマか、もしくは現代的な視点から再解釈を必要とする重要なテーマであることが期待された、というから注目される。

以上が五〇〇年史記念事業の主たる活動内容であるが、これらの活動を開拓するなかで、別の副産物が生まれてきたのだった。「大学アーキヴィストの指揮のもと、オーラル・ヒストリー・アーカイヴを集める」ことになったとということである。

この作業は、「現在までの教職員や学生、そのほか本学関係者の思い出を活用することで、大学生活の幾多の側面を解明してくれる。それは、最高の政策問題（二人の前学長とのインタビューが記録されている）から一九二〇年代の貧困学生に対するハイティー経費の問題まである。元学生とのインタビューには同窓会会館で記録されたものもあり、これが口火になつて、同大学のアーキヴィストが卒業生のニュースレター『ガウデアムス (*Gaudemus*)』上で思い出を寄せてくれるよう訴えたのだった。五〇名ほどの卒業生がこれに応じ、たいへん興味深い多彩な資料が送られてきたのである。オーラル・ヒストリー・アーカイブズを拡充し、思い出の記録を編集することが、大学アーキヴィストの恒久的な活動の一つになるであろうし、こうしてそれらは五〇〇年記念祭の時を越えて、後世の史家に有益な資料源を提供することが予想される」⁽¹⁸⁾のである。

（二）五〇〇年史研究叢書の刊行

（一）

創立五〇〇年史記念事業のうち、とくに注目されるのは研究叢書の刊行事業である。執筆ならびに刊行の体制が、

あたらしい大学史研究に確かに寄与をなすであろうと思われるからである。

アバディーン大学で五〇〇周年記念研究叢書刊行事業がはじまったのは、一九八四年のことである。この夏、大學評議会において本学の歴史編集委員会が任命され、同委員会から五〇〇年史刊行事業計画が生まれたのである。この五〇〇年史刊行事業は二つの目的をもつて始められた。創立五〇〇周年を祝うと同時に、あたらしいタイプの大学史研究に積極的な貢献をなすという目的で企画されたのである。

五〇〇年史刊行事業の基本方針について、編集委員長のJ・カーター（Jennifer Carter）は次のように述べている。

「最初の決定になりそうだったのは、一九九五年に記念となる大著を一冊——あるいは二冊ないし四冊を——出版するというのであったが、結局それに代わって短編の研究叢書を依頼することに決定したのである。そして、叢書の各冊は本学の歴史上の特定のエピソードを取り扱うことにして、そのエピソードは調査ないしあたらしい解釈が必要となるものであり、また、他大学の歴史と比較できる諸問題を提出するものであることがあつた。このアプローチの一つの利点は、各著者は自由に一つのテーマに取り組むことができ、他の著者のとる方法ないし扱う問題にひどく縛られることもない、これすなわち、全員が各自の著作から知識をえたのであるが、面倒な編集事項にあまり制約されなかつたということである。⁽¹⁹⁾」

アバディーン大学においても、創立記念祭が大学史の執筆と刊行に格好の刺激と機会を与えることになつたのだけれども、同大学では、あたらしいタイプの大学史研究に積極的な貢献をするために、格別の配慮がはらわれたことがとくに注目される。大学史上の諸々のできごとができるだけ広い背景や文脈のなかに位置づけることで狭い視野を回避し、しかも聖職者で高位の大学人を中心とりあげる聖人伝研究におちいらないような体制づくりが、目

れられたのである。

この大学史研究における視野の偏狭²¹ (parochialism) と聖人伝研究 (hagiography) を回避するためには、具体的な措置がいくつか講じられた。第一に、本事業を始めるとき、この分野で経験のある学外者を招いて、アドバイスが求められた。その一つに、セミナーがあつて、これには多くの同学の士が集まり、彼らは、「オックスフォード大学史を執筆する楽しみと危険とか、日下進行中のヨーロッパ諸大学についての幅広い作業について語ってくれる」²² のであった。

第二に、執筆はアバディーン大学以外の研究者にも依頼することが決められた。「委託された大学史研究の半数はアバディーン以外の歴史家（カナダ出身の二名を含む）によつて執筆される」²³ という。しかも、若い歴史家を執筆陣に組み入れようとしてきており、たとえば、エдинバラのC・シェファード (Christine Shepherd)、ダラム大学のP・スリー (Peter Slee)、ヴィクトリア大学（カナダ）のP・ウッド (Paul Wood) 各氏の支援をうる」とができた。また、外部評価も導入され、二名の歴史家、すなわち、エдинバラ大学のR・アンダーソン (Robert Anderson) 博士とセント・アンドルーズ大学のD・ワット (Donald Watt) 教授から、建設的な所見が継続的に寄せられたのだった。

第三に、「寄稿者になつてもらえそな人たちに大要を伝えるとい、本学の歴史をできるだけ国内的・国際的な背景のなかにおいてみる必要性を強調してきた。また、寄稿論文は出版に先立ち学外の評価者たちの承認をえなければならない、という規定も作成している」²⁴。

大学当局、具体的には大学評議会の姿勢はどうだつたかといふと、この五〇〇年史記念事業を振興はするが、「いかなる点でも干渉しようとはしていないし、また監督しようともしていない。『公認の』歴史を書くよう関係者を説

得しようとしたことなど、これまでまつたくみられない⁽²³⁾」という。

事業が開始された当初、以上のような基本姿勢や執筆体制が確かにみられた。けれども、やがていくつかの問題点が生まれてきた。たとえば、学外者にも執筆を依頼するという方針があつたけれども、分析史料の欠如とか、最適の執筆者の不足とかいう理由で、取りあげられないテーマも出てきたのだった。また、大部な著書一冊ではなくて個別テーマごとの小著を何冊も出版するという決定がなされはしたけれども、五〇〇周年にあたる一九九五年には通史を一冊まとめようという要望が起こってきた。この通史は研究叢書の各書を基礎資料にして執筆され、多数の図解が入った手軽な小冊子として刊行されることになった。J・J・カーターおよびC・A・マクラレン共著『クラウンとガウン、一四九五—一九九五』がそれである。創設期一四九五—一五九三年、変貌期一六〇〇—一七一五年、政策・啓蒙期一七一五—一八二〇年、再編期一八二一〇—一九〇六年、四〇〇周年から五〇〇周年へ一九〇六—一九九五年、という五章から構成され、スコットランド、とりわけスコットランド北部地域の学問中心地でありつづける本学が、「その周辺社会の精神的・知的・政治的・社会的生活と相互に影響しあつてきた代々の歴史」が概観されている。⁽²⁴⁾

(二)

アバディーン大学史研究といえば、すでに創立四〇〇周年のさいに刊行された通史が二書ある。J・M・ブロク『アバディーン大学史、一四九五—一八九五』（一八九五）ならびにR・S・レイト『アバディーン大学小史』（一八九五）である。⁽²⁵⁾ また、開校以来の本学で提供されてきた諸教科の授業をめぐって考察した論文、ならびに同大学関係史料文献を集めた編著書も、四〇〇周年を記念して、一九〇六年に刊行されている。⁽²⁶⁾ 同書の編者であるP・J・アンダーソン（Peter J. Anderson）は本学の図書館長を長期間（一八九四—一九二六）つとめた人であつて、かれは

大学史研究がまだ盛行をみなかつたころから本学の歴史に強い関心を示しており、大学アーカイブスの資料をめぐる大部な編著を何冊か上梓してもいる。⁽²⁷⁾

そのほか、チャーターや他の創立関連史料や、教職員・卒業生ないし校友名簿類も何度もまとめ直されている。⁽²⁸⁾一九一三年には『アバディーン大学評論 (Aberdeen University Review)』も創刊された。同誌には、本学の教育活動上の種々の側面を考察した論文が何編も掲載されている。⁽²⁹⁾

マーシャル・カレッジとキングズ・カレッジが合併した一八六〇年から一〇〇周年を記念して、『一八六〇年の合同⁽³⁰⁾』という興味深い図書も刊行されており、ここには合併祝賀式典の公式記録、一〇〇年間の大学小史、大学生活の回想記が収録されている。最後の回想記とは、当該期間中の個々の教員ならびに職員についての思い出を、学部・学科ごとに収録したもので、『アバディーン大学評論』の合併一〇〇周年記念号（一九六〇年九月）の掲載分が再録されている。さらには、マーシャル・カレッジの創立当初の歴史や、マーシャル・カレッジとキングズ・カレッジの合併をめぐる一八世紀後期の論議についての短編もまた、刊行されている。⁽³¹⁾

以上のように、アバディーン大学史については各種の史料集や研究文献がすでに何点も蓄積されていたのであるが、前述のようなあたらしい大学史研究の機運が高まるなか、これらの基本史料や基本文献が活用されて、ふたたび本格的な考察が試みられたのである。

(三)

アバディーン大学五〇〇年史研究叢書刊行計画は、一九八四年から始まつた。当初の事業計画では叢書は一五冊から成る予定であったが、一九八八年に第一書が刊行されて以来、これまでに下記の一〇点が公刊されている。いずれもアバディーン大学出版からの刊行である。

- ① R. D. Anderson, *The Student Community at Aberdeen 1860-1939* (1988)
- ② J. D. Hargreaves & A. Forbes eds., *Aberdeen University 1945-1981 : Regional Roles and National Needs* (1989)
- ③ D. Stevenson, *King's College, Aberdeen, 1560-1641 : From Protestant Reformation to Covenanting Revolution* (1990).
- ④ L. Moore, *Bajanellas and Semilinas : Aberdeen University and the Education of Women, 1860-1920* (1991)
- ⑤ R. L. Emerson, *Professors, Patronage and Politics : The Aberdeen Universities in the Eighteenth Century* (1992).
- ⑥ P. B. Wood, *The Aberdeen Enlightenment : The Arts Curriculum in the Eighteenth Century* (1993).
- ⑦ I. G. C. Hutchison, *The University and the State : The Case of Aberdeen 1860-1963* (1993).
- ⑧ C. Pennington, *The Modernisation of Medical Teaching at Aberdeen in the Nineteenth Century* (1994).
- ⑨ J. D. Hargreaves, *Academe and Empire : Some Overseas Connections of Aberdeen University 1860-1970* (1994).
- ⑩ P. Dukes ed., *The Universities of Aberdeen and Europe, The First Three Centuries* (1995)
- ⑪ C. A. McLaren, *The Student Community at Aberdeen Before 1860*.
- ⑫ D. Withrington, *Aberdeen and University Reform in Scotland in the Early Nineteenth Century*.⁽³²⁾

大学史研究をめぐるあたらしい展望と、アバディーン大学のあらたな歴史像を描こうという意欲のもと、執筆陣に委託された研究テーマは、大きく四群に分かれていた。大学の成立初期にみられる諸問題、カリキュラムおよび教育方法、学生たちの日々の生活、大学の政治史をめぐる研究、の四群である。

まず第一の、大学の成立初期における諸問題を解明し再解釈を試みようとする研究群としては、次のような研究テーマがある。①キングズ・カレッジの設立の事情と経緯、およびヨーロッパの諸大学の設立形態と比較した特徴。³³ ②キングズ・カレッジの宗教改革への対応ぶり。³⁴ ③同カレッジの人文主義的背景、ならびにそれとアバディーンの町とのかかわり具合。

第二の、教授・学習内容と方法にかかる研究群としては、①一七世紀および一八世紀初期における教授・学習内容と方法の変化、②啓蒙の時代における教育活動、とりわけカリキュラムと教育方法の革新、③知識の増大と専門化が進むなか、一八七八年から一九一四年までの改革期に改訂が試みられた、あたらしい学部カリキュラムの進展、などという研究テーマがあつた。³⁵

「大学で何が教えられており、だれによって、だれに対して、どんな目標をもつて、教えられつつあつたかを正確に明らかにすることは、しばしば難しい。とくに一九世紀後期以前の期間——学級が『非礼服』生（ある特定の学級のみに出席するもの）をしばしば含んだ時期であり、また全教授が教えたわけではない時期——には、カリキュラムの内容と意図を説明することはけつして簡単ではない」。しかしながら、アバディーン大学には幸いにも「近代初期の学生たちのノート類のすばらしいコレクションと、大量の手書きのクラス・リスト（継ぎ合わされるなら、教授活動の構造についておおくのことを明かにするであろう）」が保存されているから、研究の進展がおおいに期待された。

第三の、学生の日常生活をめぐる研究群には、①創立当初から一九世紀なかばに至るまでの学生生活、②学生たちの自治活動、③一九世紀後期にみられる女子学生の位置づけ、ならびに一八九二年の条例による女子の入学許可をめぐる論議、などという研究テーマがある。

第四の、大学の政治史についての研究群といえば、次のようなテーマがあつた。①一八世紀における教授陣の構成と任免、およびキングズ・カレッジとマーシャル・カレッジの両カレッジの置かれた政治的環境、②一八世紀後期から一八六〇年までの、大学と地元の政治・社会との相互関係³⁶、③一八二〇年代の王立委員会と一八六〇年ににおける両カレッジの合併にみられる、一九世紀における大学への政府の関与（大学の施設設備や教師の俸給への政府の財政補助など）。

(三) 個別テーマについての研究書

研究叢書としてこれまでに刊行されたのは、先記のような一〇冊を数える。そのなかには、これまで本格的に分析されることのなかった主題ないし分野についての成果がある。しかし、新奇な局面ばかりが取りあげられたわけではない。なじみのある主題も当然とりあげられたのだが、考察を深めて再評価をめざそうとした著作が目につく。しかも、本研究叢書は「田下のところ、とりわけ近代については、スコットランド諸大学のなかでもつとも綿密に引証した考察」をなしている、という評価がある。³⁷ それらの概要を簡単であるが紹介すると、下記のとおりである。

① R. D. Anderson, *The Student Community at Aberdeen 1860-1939* (1988)

本叢書の第一書である。著者はエディンバラ大学の歴史学の上級講師であり、一九世紀のフランスおよびスコットランド教育制度研究を先導する一人である。

本書は、学生社会ないし学生の自治活動という、これまでの大学史研究ではあまり顧みられなかつた主題を扱い、アバディーン大学生の構成とそれに影響をおよぼした種々の伝統ないし出来事をめぐつて、綿密な分析が展開されている。

具体的には、学生の社会的出自・入学年齢・就職先を分析し、一九世紀のスコットランドでは、下層の出であるが、大学で勤勉に学習して優秀な成績をおさめた学生が輩出したという説は、誇張のしそぎであるということを示そうとした。また、学生のもつ団体意識の高揚や学生代表者会議 (Students' Representative Council) の活動を取りあげ、政府や議会という学外との関係だけでなく、同会議を介して学生の意向がアバディーン大学の運営を大幅に左右した、という特徴点を指摘している。

そのほか、学生のライフスタイルの諸側面(勉学、服装、社交習慣、娯楽など)、ならびにディベイト会、ケルト会、合唱団・管弦楽団、演劇団体などにみられる文化活動の盛衰、さらには、アバディーン市内の種々の呼び物、喫茶店、ダンスホールなどについても言及している。そして、当該期間中のアバディーン大学の学生生活には、ほかの大学都市には見られないタウンとガウンの関係がみられること、アバディーン大学生には保守的傾向^{〔38〕}が強くみられ、英國の他大学の学生たちが左翼政治と結びついた戦間期においてすら保守性が認められることを指摘し、これららの特徴はかれらの出身地であるスコットランド北東部地域の文化および経済と関連がある、と説明している。

本書は、高等教育への国家関与をめぐる考察である。具体的には、戦後の再建計画のはじまる時期から、大学補助金委員会より支給される補助金が削減される時期までを扱っている。補助金削減は本学の研究評価への批判、低い研究序列のあらわれと受けとめられ、一九八一年以前の三五年間ににおける本学の再点検をおこなっている。

アバディーン大学は、政府補助金の拡張期が急に終わった一九七三年ころ、英國のどの大学よりも大きな影響をうけ、以後長い間、経費の削減と減少の時期がつづいた。本書では、政府や大学補助金委員会の非難に終始するのではなく、バランスのとれた分析をなし、アバディーン大学が学内の政策決定機構のせいで、政府の大幅な財政補助は続いているという兆候に対し機敏に対応しなかった、という点を指摘している。

所収論文のひとつ、R・ヴィーア「医学部と近隣地域の健康管理」⁽³⁹⁾のばあいについてみると、ここでは、戦後の医学教育に対する国庫助成をめぐる分析がなされている。創始当初から、アバディーン大学の医学教育は地元に優秀な医師を供給することをめざしていた。したがって、大学の医学設備に対する政府補助金が第二次世界大戦後に激増したとき、同大学は大幅に増額された公費補助金を臨床教育設備の拡充にあてたのだつた。大学は医学研究にこそ多額の金をあてるようにと奨励されたのだが、実際はそれにはあまり留意しなかつたのである。一九七〇年代になると、大学補助金委員会は臨床教育よりも医学研究に重点配分することになつたので、アバディーン大学は設備、スタッフ、学生のための必要経費を自力で賄うことになる。その結果、とくに一九八一年以後財政的に窮することになつてしまつた、といふのである。⁽⁴⁰⁾

なお、本書は、一九八九年に学内で開催された公開セミナーの報告論文集である。当該期間中に本学にかかわり

のあつた人たちを集めて、記憶に残る出来事を記録し、その出来事の意義を回顧して大学史研究を奨励するという目的で開かれている。

- ③ David Stevenson, *King's College, Aberdeen, 1560-1641 : From Protestant Reformation to Covenanting Revolution* (1990)

本書があつかうのは「アバディーン大学の長い歴史のうちでも、もつとも複雑ではつきりしない時期の一〇」(まえがき)であり、宗教改革とその後の混乱した政治状況のなかでの大学の景況が、考察されている。

この時期については、「証拠資料の欠如により、神秘に包まれて、答えられないままの問題が数多くある」(本書一頁)。それだけに、筆者は切れ切れの史料をつなぎあわせながら考察を進めている。主題は一点ある。第一は、本学がローマ・カソリック教の学校からプロテスタントの学校に一変した事情と経緯ならびにその成果について、第二に、キングズ・カレッジの授業およびカリキュラム、スタッフおよび学生の日常生活と活動の模様について、である。本学におけるこのような近代初期の歴史は、オックスフォード大学およびケンブリッジ大学の歴史が念頭におかれ、それらとはいかに異なっているかが示されていると、指摘するものある。⁽⁴¹⁾

なお、本書は本文一二五ページ、注が二〇ページという短編。これに三〇ページほどの付録がつき、そこには創立時の四種類の基本文書が、ラテン語から英語に翻訳して添付されている。

- ④ Lindy Moore, *Rajellas and Seminas : Aberdeen University and the Education of Women, 1860-1920*

英國女子高等教育史研究といえば、これまでオックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンの三大学に集中していたが、本書は、アバディーン大学における女子教育の問題に光をあてている。

スコットランド諸大学では、一九世紀後期に、大学における女性のステイタスをめぐる論議がわきおこり、一八九二年には女性の入学がほぼ完全に認められるようになった。そのなか、「アバディーン大学はどの学部にも女性の入学を認めたスコットランドで最初の大学だといわれる」⁽⁴²⁾。本書は女性が大学内で確たる位置を占めるまでの苦闘を描いており、「オックスブリッジ以外の英國女子高等教育に関する、今なお唯一信頼のできる説明のひとつであり、スコットランド学生については唯一の説明を著した」⁽⁴³⁾と位置づけられている。

⑤ Roger L. Emerson, *Professors, Patronage and Politics : The Aberdeen Universities in the Eighteenth Century*
(1992)

著者は、スコットランド啓蒙史研究で知られたカナダ人研究者であり、西オンタリオ大学（カナダ）の歴史学教授である。

本書では、一八世紀におけるアバディーン大学の教師の任命をめぐる、実証的な考察がみられる。一八世紀のアバディーン大学といえば、啓蒙思想の進展と政治面での汚職の横行が特徴的であった。学問研究の面では傑出した時期であつたのに、両カレッジとも政治の強い影響を受けていた。とくに大学人事は、キングズ・カレッジでは学

内行政とカウンティ政治との利害で、またマーシャル・カレッジでは市民や地域の利害関係でもって左右された。そのほか、ジャコバイト（スチュアート王朝支持者）対ハノーバー王家支持者、ロンドン対エдинバラ、さらには連合王国同化政策という政治的背景のなかでも大学人事が決定された、といふことが説かれている。

⑥ Paul B. Wood, *The Aberdeen Enlightenment : The Arts Curriculum in the Eighteenth Century* (1993)

上掲⑤のR・L・エマソン著と同じく、本書も、アバディーン大学では「近代以前に地域の影響が実に甚大であった」ことを実証している。ヨーロッパの諸大学で長期にわたつておこつた構造変化が、アバディーン大学の二つのカレッジではきわめて独特なあらわれ方をしたこと、および、「近代以前にあつては、单一の大学の歴史を理解するのにも、ヨーロッパ内での相対的な特徴が地域的特徴と同じくらいいかに重要であるか」といふことも、はつきり示している。⁴⁴⁾

本書の著者ウッドも、スコットランド啓蒙を専攻するカナダ人研究者である。啓蒙運動という一般的な主題をあつかうが、視点はあたらしい。エマソン著が啓蒙運動を担つた教師群像を描こうとしたのに對し、本書はかれら教師が教えた内容、とくに一八世紀の人文科学のカリキュラムについて分析し、しかも、一八世紀のマーシャル・カレッジとキングズ・カレッジの相違点を強調している。両カレッジの教師たちは学生のリクルートに熱心であつたが、この学生募集における競いあいが、一八世紀に両カレッジが一つに合同できなかつた一大要因であつた、といふ所見も示されている。

⑦ Iain G. C. Hutchison, *The University and the State : The Case of Aberdeen 1860-1963* (1993)

著者はスターリング大学の教授で、『スコットランド政治史⁽⁴⁵⁾』（一九八六）という名著がある。

本書もまた、高等教育への国家関与というテーマをあつかっている。アバディーン大学を含めてスコットランドの諸大学は、一九世紀にはイングランドの大学よりも強く国からの影響を受けたのだが、ここでは国家関与がむしろ歓迎されていた。ところが、二〇世紀になると、国からの財政援助を必要としたけれども、あまり歓迎されなくなつた。また、スコットランド諸大学振興カーネギー財団が、一九二〇年以降の大学補助金委員会による公費支出のモデルであつた、などということを論証している。大学補助金委員会は、一九六〇年代以前においても、政府と大学の媒介者として、不干渉主義政策をとつたわけではなかつたが、カーネギー財団は大学と国家の関係ぶりに影響力をもつていたというのである。

⑧ Carolyn Pennington, *The Modernisation of Medical Teaching at Aberdeen in the Nineteenth Century*, 1994.

『一九世紀アバディーンにおける医学教育の近代化』と題しているように、アバディーンという小さな都市にマーシャル・カレッジ医学部とキングズ・カレッジ医学部という二校がはげしく競合しあいながら併存し、しかも一九世紀初期には医学教育が沈滞していたが、一八六〇年に両カレッジが合併し一つの医学校になつて以降は、高度な医学教育課程を提供し、国内とヨーロッパにすぐれた医学生を送りだすに至つたという、事情と経緯が分析されてゐる。

とくに一九世紀後期については、医学教育方法の刷新、科学的研究の進展がみられたことが、学問分野ごとに詳しく考察されている。また、この時期、医学教育を充実する必要から、マーシャル・カレッジの野心的な再編計画が進展したという意味で、医学教育のありかたが本学の形成に大きな影響を与えたということを指摘した。

ちなみに、本書は、第一章 一八六〇年以前と以後の医学教育、第二章 解剖学と医学教育課程・ストラザズおよびハクスリの影響、第三章 生理学と病理学、および科学的医学の到来、第四章 外科・新旧方法の対決、第五章 内科・薬物学・産科学・法医学の教育、結論、という六部から構成されている。

- ⑨ John D. Hargreaves, *Academe and Empire: Some Overseas Connections of Aberdeen University, 1860-1970*
(1994)

本書は、「アバディーン大学と海外との関連、ならびにそうした関連が同大学と学生たちが赴く諸国に対してもおよぼす影響について、オックスフォードを除いては、他のどの大学も試みなかつたほど徹底的に考察した」と、評されている。⁽⁴⁶⁾ここにいうオックスフォード大学と海外との関係を考察したあたらしい著書とは、R・シモンズ『オックスフォードと英帝国』⁽⁴⁷⁾（一九九六）をいう。

本書とシモンズ著はともに、「植民地の公務員が、第一次世界大戦前における程度英國の大学卒業生を採用しているか、また、大口の雇主として大学のカリキュラムにある程度の影響を及ぼしたか」ということを、明らかにしている」のだが、両書には注目すべき相違点がある。シモンズ著は「オックスフォード大学の男子卒業生の少數ながら一定数が、當時採用されて大英帝国を維持したということを発見した」のに対し、本書では「アバディーン大学男子卒

業生は、オックスフォード大学よりも断然多くが大英帝国の中間管理職についたということを見いだした」のである。

オックスフォード大学およびアバディーン大学の出身者にたいする植民地の影響力もまた、異なっていた。「オックスフォード大学出身者は指導的なポストに盛んに求められたし、また、一八九二年以後は、権威あるインド高等文官制度 (Indian Civil Service) が志願者に課した入学試験で優利になつたのだった。一方、アバディーン大学は、歴史的にみると、少数の比較的優秀な学生をインド高等文官職に送りこんだにすぎない。それより多くの卒業生は、帝国内のそれほど高くないポストについたのだった。北東部スコットランドの卒業生たちの要求が、供給される仕事よりもはるかに上回っていたからであり、また、ほかの地域の就職市場、とりわけイングランドが不足分を補うことができなかつたか、または補わなかつたからであろう。」⁽⁴⁸⁾ ところである。

⑩ Paul Dukes ed., *The Universities of Aberdeen and Europe, The First Three Centuries* (1995)

創立以後三世紀間におけるアバディーン大学とヨーロッパならびに世界との関連性をめぐる著作であり、六編の論文から成っている。このような研究主題は従来蓄積のなかつた分野であり、この五〇〇年史研究叢書のなかであらたに取りあげられたといつていいであろう。

各論文のテーマをあげると、次のとおりである。①アバディーン大学創立時におけるヨーロッパ諸大学の実状、および本学に対するヨーロッパ諸大学の影響。②一六世紀・一七世紀にヨーロッパに留学したアバディーンの学生たち。③一七世紀初期のドイツで教鞭をとつたD・リデル (Duncan Liddel) にみられる、スコットランドとヨーロッ

パ間の知的関連。④ロシア高等教育の開拓者になつた数学者H・ファーアクアスン (Henry Farquharson) の活躍。

⑤一八世紀の啓蒙時代におけるアバディーンの知的生活。⑥一七世紀および一八世紀初期に、マーシャル・カレッジの再建のために財政支援をしたポーランド在住のスコットランド商人たち。

本書の主題であるアバディーン大学とヨーロッパ間の教師および学生を介した交流関係は、今日一段と進展しているが、皮肉なことに、一八世紀の啓蒙時代に希薄になつたことがあつた。そのころ、アバディーンは海外を、とりわけ北アメリカを目ざしはじめたころであつたからである。

六編の論文のうち、J・M・フレチャーの論文「ヨーロッパのなかでのアバディーン大学の設立」⁴⁹が、「比較調査研究の有望さを具体的に示した」点でとくに注目される。かれは「一四九五年創設のキングズ・カレッジが、古い起源をもつヨーロッパ諸大学の特徴であるが、当時ないがしろにされつづあつた教育実践と学校制度の仕組みに、なぜ、これほど強く固執したか」という主題をめぐつて考察している。そのさい、「広範な一次資料を駆使する無類の力を發揮して、こまごました古記録類を用いてたいへん強力で説得力ある立論をしていく見事な能力を示しながら、アバディーンの特異性を明かにしている。そのなかで、かれは独自の特徴ある宗教的・政治的な仕組みと対立をかかえた、人口が少ない低開発地域において大学を維持する諸問題に言及している。」

このフレチャー論文には、比較考察という研究方法と「地域文化に対する鋭敏な感受性」が顯著にみられるのが、スコットランドの大学史家たちが過去十年間に斯学に対してもなしてきた貢献も、この二点であつた。大学史の比較考察であり、大学と地域文化とのかかわりである。これらは「今後の研究進展の一つの方向を指示するもの」として、注目される。⁵⁰

なお、本書の編著者P・デューケスはアバディーン大学歴史学教授。執筆陣には、同大学のほかに、アストン大

学、セント・アンドルーズ大学、モスクワの科学アカデミー、カナダのヴィクトリア大学の研究者をも迎えていることも特筆される。

四 まとめ

英国では、近年、大学史研究への関心の高まりがみられ、一つの研究傾向が認められる。

第一に、創立記念祭が一大刺激剤になり個別大学史研究が盛んになつてゐるが、内容は「祝賀的なものから分析的な方向へ進んできている」。「個々の機関の物語を記録し著名な先祖をたたえるというかつての支配的な伝統」に従うのではなく、「できうるかぎり広い背景で、すなわち社会的・政治的・経済的・知的・文化的な背景のなかで解釈しよう」という傾向である。

第二に、執筆の体制と刊行の形式、ならびに全体的・通史的叙述から問題史的叙述へという叙述のスタイルにおける変化がみられる。多くの研究者が参画し、執筆者各人はそれぞれ専門とする領域ないし特定テーマを担当し、主題ごとの何冊かの本からなる叢書形式で刊行するという方式である。さらには、内外の他の大学を視野におきめて自己の大学史を位置づけるという、重要な視点も認められる。

アバディーン大学のばあいも、創立五〇〇周年を記念した大学史研究叢書の刊行事業が企画され進展している。あたらしいタイプの大学史研究の創出に積極的に貢献することをも目ざした事業と自覚されているだけに、注目される。

この五〇〇年史研究叢書刊行事業では、学外者をも含めた何人もの研究者に、各自の専攻テーマについてそれぞ

れ執筆を委託する一方、専門的な助言と評価を依頼している。執筆陣に委託されたのは、大学創立当初にみられた諸問題、カリキュラムと教育方法、学生たちの日常生活、大学の政治史にかかわる諸テーマであり、これまでに一〇冊の図書が刊行をみている。具体的には、学生たちの生態や社会的出自、大学と国家の関係、大学と宗教との関連、啓蒙運動を担つた教師たち、大学のカリキュラム、女子教育、海外との関係と交流、などといったテーマについての著作である。新奇なテーマもあれば、一般的なテーマでも考察を深めて再評価をめざしたものもあるが、他大学の歴史をおもめて比較考察するという問題意識が重視されていることが注目される。

叙述の対象、分析の方法、執筆の体制、刊行のスタイルなどといった点で、あたらしい意欲的な大学史研究であるが、それが可能になつたのも、名簿や年代記の編纂、制度や組織・機構の変遷を主体にした伝統的な通史の執筆といつた、先人の地味で地道な作業の蓄積があればこそであるところを忘れてはならないであろう。

注

- (1) *Oxford Review of Education*, Vol. 23, No. 2 (June 1997), Special Issue : Writing University History.
- (2) J. Howarth, 'Introduction', *ibid.*, p. 147.
- (3) D. Greenstein, 'University History : Recent Contributions from Scotland', *ibid.*, p. 223. 本稿は、主としてグリーンスタイル論文、ながら後出のカーター論文（本稿の注13）に多くを負ってゐる。
- (4) 'の研究計画の目標、内容、問題点についてせ' D. Drummond, A. Gaukroger & R. Lowe, 'Writing a University History : Problems and Possibilities', *History of Education Society Bulletin*, No. 51 (Spring 1993) pp. 40-47 を参照。
- (5) J. Carter, 'Writing University History for Aberdeen's Quincentenary', *History Today*, 45-2 (Feb. 1995) p. 7.
- (6) J. Butt, *John Anderson's Legacy, the University of Strathclyde and Its Antecedents 1796-1996*. Tuckwell Press,

Scotland, 1996.

- (～) D. Greenstein, *op. cit.*, p. 224. 「アーバン・カレッジ」の紹介——『ノーザン・カレッジ』(1996)の紹介——「名古屋大学教育学部『教育社会史研究室年報』第四号(1998年11月)711—87頁参照。

- (∞) 'Conference Announcement', *History of Universities*, Vol. XIV (1998) pp. vii-viii.
- (σ) A. L. Brown & M. S. Moss, *The University of Glasgow : 1451-1996, A Brief History*. Edinburgh U.P., Edinburgh, 1996.
- (10) M. McLeod, '550 Years On : Preparing for the Next Century', *Avenue*, No. 21 (Jan. 1997) pp. 9-10 参照。
- (11) R. Anderson, *Education and Opportunity in Victorian Scotland : School and Universities*. Aberdeen U.P., Aberdeen, 1983. 「アーバン・カレッジ」『教育と機会』(1996)の序文に記述。本書は「その後、カレッジ教育を発展させ、アーバン・カレッジ」の誕生につながる。D. Greenstein, *op. cit.*, p. 224.
- (12) D. Greenstein, *ibid.*
- (13) J. Carter, 'Aberdeen University's Quintcentennial History : A Report', *History of Universities*, Vol. VII (1988) p. 318.
- (14) 一九八五年や「十一」「教育と機会」(The Changing Curriculum)」の紹介——「アーバン・カレッジの紹介がねりなわれた。
- ① C. Shepherd, Scottish Philosophy Teaching in the Seventeenth and Early Eighteenth Centuries.
- ② P. Jones, The Polite Academy in the Eighteenth Century.
- ③ D. Withrington, Pressure from Below : the Schools, the Universities, and the Curriculum.
- ④ D. Johnston, Lecture Notes and Other Resources for Tracing the Changing Curriculum before the Fusion.
- ⑤ N. Fisher, The Scottish Lecturing Tradition and Curriculum Change.
- ⑥ P. Wood, The Changing Science Curriculum in Enlightenment.
- ⑦ R. Anderson, The Changing Curriculum in Scottish Universities in the Nineteenth Century.

- ⑧ C. McLaren, Opportunities and Challenges in Tracing the Changing Curriculum since the Fusion.
- ⑨ E. Patterson, The Changing Curriculum in the 1980s.
「九八十年代の大学の構造（The Building of the University）」博士論文。資料が用意された。
- ① J. S. Smith, The Pictorial Evidence to 1860.
- ② J. C. Stone, Maps and Plans Containing Evidence of the Evolution of the Buildings of Aberdeen University.
- ③ The Buildings of the University pre-1860 : a Select Bibliography.
- ④ The Buildings of the University pre-1860 : a Annotated Select Bibliography.
- ⑤ J. Carter, 'Aberdeen University's Quincentennial History : A Report', *op. cit.*, p. 324.
- ⑥ J. J. Carter & J. H. Pittock eds., *Aberdeen and the Enlightenment, Proceedings of a Conference Held at the University of Aberdeen*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1986 ; Do., *The University in its Urban Setting*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1993.
- ⑦ J. Carter, 'Writing University History for Aberdeen's Quincentenary', *op. cit.*, p. 8.
- ⑧ Do., 'Aberdeen University's Quincentennial History : A Report', *op. cit.*, pp. 323-324.
- ⑨ Do., 'Writing University History for Aberdeen's Quincentenary', *op. cit.*, p. 7.
- ⑩ Do., 'Aberdeen University's Quincentennial History : A Report', *op. cit.*, p. 317.
- ⑪ *Ibid.*
- ⑫ *Ibid.*
- ⑬ *Ibid.*, p. 318.
- ⑭ J. J. Carter & C. A. McLaren, *Crown and Gown 1495-1995, An Illustrated History of the University of Aberdeen*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1906, p. v.
- ⑮ J. M. Bulloch, *A History of the University of Aberdeen, 1495-1895*. Hodder and Stoughton, London, 1895 : R. S. Rait, *The Universities of Aberdeen, A History*. Bissett, Aberdeen, 1895.

- (26) P. J. Anderson ed., *Studies in the History and Development of the University of Aberdeen, A Quatercentenary Tribute Paid by Certain of Her Professor & of Her Devoted Sons*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1906, 𢃥 23°。
- (27) Do. ed., *Fasti Academiae Marischallanae Aberdonensis, Selections from the Records of the Marischal College and University, 1598-1860*. 3 Vols., New Spalding Club, Aberdeen, 1889, 𢃥 23°. H. Silver & S. J. Teague, *The History of British Universities 1800-1969, A Bibliography*. Society for Research into Higher Education, London, 1970, pp. 59-65 参照。
- アーヴィングは『英國図書館人名録』一八〇〇—一九八五に取つあたる、アーヴィングの大学「図書館の大拡充」名組を取り扱う。一九八五年の大学の歴史を執筆した」と記されている。W. A. Munford, *Who Was Who in British Librarianship 1800-1985*. Library Association, London, 1987, p. 2.
- (28) L. Donald & W. S. Macdonald eds., *Roll of Graduates of the University of Aberdeen 1956-1970, with Supplement 1860-1955*. The University, Aberdeen, 1982, 𢃥 23°。
- (29) C. A. McLaren, 'The Process of Curricular Change : "the Pathology Question at Aberdeen" 1875-1884', *Aberdeen University Review*, LI (1985 / 86) pp. 474-484, 𢃥 23°。
- (30) W. D. Simpson ed., *The Fusion of 1860 : A Record of the Centenary Celebrations and a History of the United University of Aberdeen 1860-1960*. Oliver and Boyd, Edinburgh, 1963.
- (31) G. D. Henderson, *The Founding of Marischal College, Aberdeen*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1947 ; W. R. Humphries, *William Ogilvie and the Projected Union of the Colleges, 1786-1787*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1940.
- (32) 本書は、一七八〇年代の王立教員養成所の統合化と、一七八〇年以後の権力構造の変遷について分析する。十九世紀の大学制度に対する政府関与の程度を記述する「英國の高等教育の歴史」である。J. Carter, 'Aberdeen University's Quincentennial History : A Report', *op. cit.*, p. 322.
- (33) エドワード・マーリンは、J. M. Fletcher & L. J. Macfarlane, *The Foundation of King's College, Aberdeen in its European Context* の刊行が予想される。J. Carter, *ibid.*, p. 320.

(34) 「だらの研究トーマス・カーラー、既述の、学外の若き歴史研究者に依頼された。やなわら、①セイ・スコットランド、②セイ・ブリティッシュ・アカデミー・ペニーがそれを担当した。」(P. B. Wood, *The Aberdeen Enlightenment : The Arts Curriculum in the Eighteenth Century*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1993)。

(35) J. Carter, 'Aberdeen University's Quincentennial History : A Report', *op. cit.*, pp. 320-321.

(36) 本トーマス・カーラー A. MacLaren, *The Professors, the Pulpit and the Press at Aberdeen* (刊行が予定されていた)。J. Carter, *ibid.*, p. 322.

(37) R. D. Anderson, *Scottish Education since the Reformation*. Stevenson, Dundee, 1997, p. 1.

(38) アベルターハ大学生の保守性について、田口仁久『「北方の大学生活」史』(文化書房博文社、一九九五)を参照。同書では、学生たちの大學生的威儀行為、すなは名譽綱長の選挙や就任講演における生態、あることは学生の同好会活動について、縦今れども。

(39) R. Wier, 'The Medical School and Health Care in the Region', in J. D. Hargreaves & A. Forbes, eds., *Aberdeen University 1945-1981 : Regional Roles and National Needs*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1989.

(40) D. Greenstein, *op. cit.*, p. 225.

(41) J. Carter, 'Writing University History for Aberdeen's Quincentenary', *op. cit.*, pp. 7-8.

(42) Do., 'Aberdeen University's Quincentennial History : A Report', *op. cit.*, p. 321.

(43) Do., 'Writing University History for Aberdeen's Quincentenary', *op. cit.*, p. 7.

(44) D. Greenstein, *op. cit.*, p. 226.

(45) I. G. C. Hutchison, *A Political History of Scotland 1832-1924 : Parties, Elections and Issues*. Donald, Edinburgh, 1986.

(46) J. Carter, 'Writing University History for Aberdeen's Quincentenary', *op. cit.*, p. 7.

(47) R. Symonds, *Oxford and Empire : The Last Lost Cause?*. Macmillan, London, 1996.

(48) D. Greenstein, *op. cit.*, p. 225.

- (49) J. M. Fletcher, 'The Foundation of the University of Aberdeen in its European Context', in P. Dukes ed., *The Universities of Aberdeen and Europe, the First Three Centuries*. Aberdeen U. P., Aberdeen, 1995.
- (50) D. Greenstein, *op. cit.*, p. 226.

本稿を作成するにあたり、松村好浩先生（姫路獨協大学）から指導をうけた。記して多謝する。
(かず・まつら
名古屋大学教育学部)